

# 三次人形

みよし

## 日本土人形資料館

〒383-0013 長野県中野市大字中野1150  
Tel&Fax:0269-26-0730

- 開館時間／9:00～17:00  
(12月～2月 10:00～16:00)
- 休館日／毎週木曜日  
年末年始(12月29日～1月3日)
- 観覧料／一般200円(団体150円)  
高校生100円(団体70円)  
※団体は20人以上

子どもの成長と幸せを託して

- 広島県無形文化財指定
- 広島県指定伝統的工芸品
- 三次市無形文化財
- 三次市「みよしの匠」認定

## 三次人形





# 五代目窯元・丸本

たかし

轟さん

インタビュー



## 30年あまり続けてきた人形づくり

三次人形五代目の丸本さんは、明治時代の型の復元や干支などの独自の作品を手がけるなど、精力的に活動されています。平成3年には広島県の伝統的工芸品、また、平成18年には広島県無形文化財に指定された三次人形の丸本さんですが、やさしい表情に描くのは難しいものです、とおっしゃいます。「まだ、私の母が描いたようには、やさしい表情が描けない。30年あまり人形づくりを続けてきた現在も、(母の作った人形を見て)『この人形を作ってほしい』といわれると、『申し訳ないが、もう少し待ってください』と言って待ってもらっていますよ。」 現在、奥さんと職人さん2人のほかに、ゆくゆくは6代目となる息子さんも同じ作業場で黙々と人形作りに勤しんでいる。



### 天神だけでなく、色々な型があることを知ってほしい。

明治以来伝わる三次人形は140種類ぐらいありますが、現在、私が作っているのは70~80種類ぐらいですね。将来的に実現したいと思っているのは、すべての種類を再現した明治以来の集大成ですね。また、私ならではの「平成の作品」も手がけてみたい。そして私の作ったものを一般の方々に購入していただき、人形制作が生活の糧としてやっていけるようになればいいですね。誰もが買って、誰が見てもほっとするようなもの、それが工芸品だと思っていますし、私自身そのスタンスを守っていきたいと思いますね。

「父親の後を継いで簡単な気持ちで始めた仕事ですが、今、何をしても面白い。人形にも愛着がわき、人形づくりの醍醐味を実感しているところなんです。だから今後よりいっそう自分の納得のいくものができそうな予感がしています。」  
人形づくりに寄せるひたむきな情熱と、地域の生活に溶け込んだ人形づくりの伝統は、丸本さんの中に、今も三次の町に脈々と息づいている。

### 人形づくりに寄せるひたむきな情熱!!

「一年一工程」を守っていくつもりです。空調して、夏場も絵付けをしたらどうか、と言われることもあるけれど、何もそこまでしてつくる必要はないと思っています。暖かい時期に粘土をこねる水仕事をして、寒い時期に絵付けをするのは、節用という季節的な用途から考えても、非常に合理的なんです。これからも自然に逆らわないで。」

ニカワってというのは、ゼラチンが主成分なので、暖かい時期だと、塗っても流れてしまったり、色がまだらになってしまったり……。ですから、『絵付け』は昔から寒冷期の作業とされたんです。それでニカワを湯煎で溶かしながら彩色する、という技法が継承されているんです。だからね、絵付けのときにはいちだんと気合いが入るんです。冬か、と言われることもあるけれど、何もそこまでしてつくる必要はないと。暖かい時期に粘土をこねる水仕事をして、寒い時期に絵付けをするのは、節用という季節的な用途から考えても、非常に合理的なんです。これからも自然に逆らわないで。」

「この仕事の魅力は、やっつけていることすべてです。」

髪の毛一本、目の表情ひとつさえも、本当に満足のいくものを作るために、勉強の毎日です。絵付けの際には、白い顔料や泥絵の具にニカワを混ぜて塗るのですが、三次人形の特有の光沢のある色合いは、このニカワの働きによるものです。

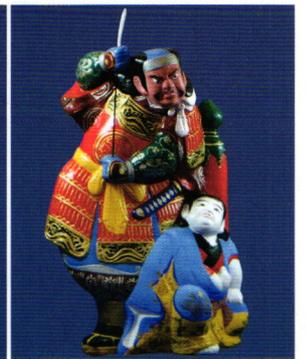
### ■三次人形窯元のご案内

## 三次人形窯元 丸本 轟

たかし

〒728-0014 広島県三次市十日市南4丁目12-7  
Tel:0824-63-7502 (Fax兼用)





- 広島県無形文化財指定
- 広島県指定伝統的工芸品
- 三次市無形文化財
- 三次市「みよしの匠」認定

みよし

# 三次人形

三次人形の起源には諸説がありますが、一般的には寛永年間(1633年頃)、三次藩主浅野長治が江戸浅草の人形師(森喜三郎)をつれ帰り、わが国の歴史上の勇者や伝説上の人物の土人形を作らせ、家臣が一子をもうけるたびにお祝物として、この土人形を贈ったと言われています。三次人形は、370年もの間継承され、光沢のある白い肌、目は切れ長でありながらやさしい表情や八頭身のスリムな体型、容姿端麗で美しく、今も広島県の県北地方の節句人形として親しまれています。

## 三次人形の誕生と歴史

江戸時代、中国地方では各地で泥人形が作られていました。三次地方も同様で、三次宮ノ海で人形が作られており、その当時は制作場の在る地名にちなんで宮ノ海(又は宮ノ峽)人形と呼ばれていました。

明治時代に入って丸本儀十郎が宮ノ海人形窯元から分家し、(現)三次市十日市に窯元を開設し、初代十日市人形窯元として独立し、人形制作にあたりました。その後、全盛期をむかえ、庄原(田原人形)、上下(上下人形)、三原(三原人形)でも土人形の制作が行われるようになりました。しかし、戦争の足音と共に衰退の一途をたどり、十日市人形だけが人形制作を続けていきましたが、第二次世界大戦中の昭和17年やむなく中断されることとなりました。

その後、昭和31年、三代目窯元である兄(藤二)の了解を得、弟(恵澤)が四代目窯元として周囲の文化人や、知識人の応援を受け人形制作を再興し、名称も十日市人形から、三次人形に改め制作を続けました。

昭和40年、四代目が急死し、当時、美術大をめざし勉学中だった埴氏が五代目を引き継ぎ、六代目(尚志)を後継とし現在にいたっています。

## 生活に溶け込む三次人形

広島県の県北地方では、初節句には子ども誕生の喜びと成長への願いを託して、男の子・女の子ともに三次人形を贈ります。それは旧暦の3月3日、現在では新暦の4月3日ごろに、親類、知人、友人が三次人形を一つ二個持ってお祝いに行くというものです。男の子の場合は天神または男神、女の子の場合は天孫または女神を持参し、集まった人形を飾って節句のお祝いをします。これは県北では春の恒例行事です。また、これから畑仕事が始まるという春の訪れを告げる行事でもあるのです。

三次人形は子供自身の夢を温かく見守る人形として人々の生活に溶け込み、地元からは「でこ人形」の愛称でも呼ばれ、節句の時期に「でこ市」が開催されると、子供に人形をねだられた親子連れが三次城下を散策する姿がみられたようです。

## ●5月～10月／形作りと素焼き作業



### 土のブレンド

三次地方で採取してきた粘土を水に溶かし、きめの細かい「とろろ」で濾して、木の根やごみなどを取り除く。半乾燥した土を2～3種類ブレンドして、よくこね、人形用の粘土をつくる。



### 粘土型へはりつけ

明治初期につくられた粘土型の内側に、粘土を3～5ミリの厚さに貼り付けていく。1～2時間置いておくと、粘土型が水分を吸収して、粘土が型より少し小さくなるので、それを型からはずす。



### 2つの粘土型を接着

粘土型は前後に2つに分かれていて、それらを合体させひとつの人形にする。接着する際には、どろどろの粘土を糊として使用。乾いたら、はみ出した部分をきれいに取り除く。

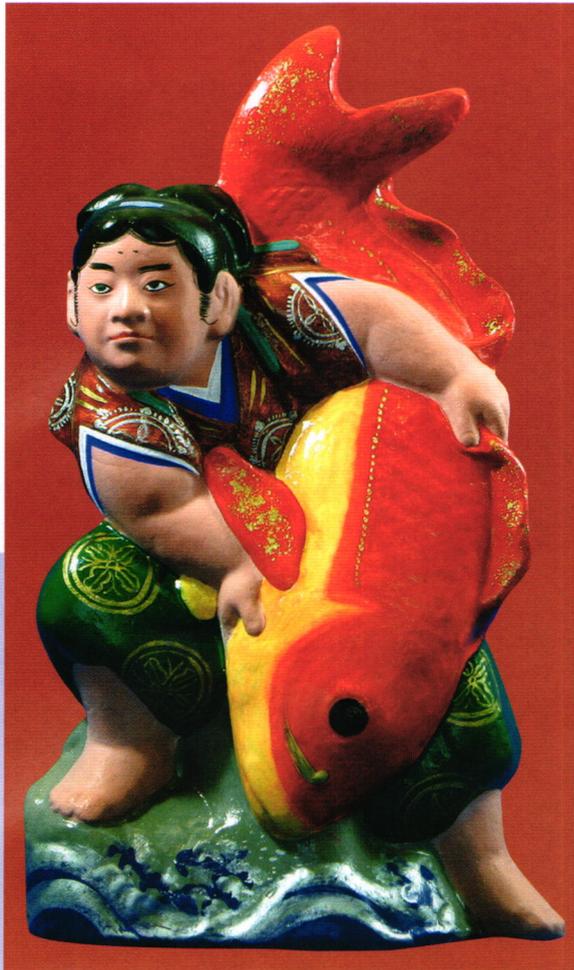
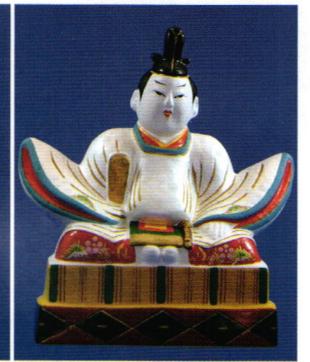


### 自然乾燥

天気の良い日なら1週間、雨や曇りの場合には2週間くらい乾燥させる。

三次人形ができるまで

一つの作品を仕上げるのに一年かかります。5月～10月に形を作り、焼くという外の作業の後、11月～4月には色付けなどの家内作業が行なわれます。



### 「光人形」とも呼ばれています。

土人形の彩色は通常の場合、着物など、まわりの部分から着色しますが、三次人形の場合は、まず顔から始めるのが特徴です。胡粉(白い牡蠣の粉)を、下塗り、中塗り、上塗りそれぞれ濃度を変え、それぞれ4、5回塗り、その後、絹の布で磨きをかけます(みがき手法)。このように艶を出してから顔を描き、胴体の部分は着色の後「ニカワ」を塗り光沢を出すため、別名「光人形」と呼ばれています。

人形は現在、70~80種余りが作られ、有名なのは「天神」で、松負(まつおい)、梅持、牛のり天神などの10種類があります。

### 人形の種類と謂れ

#### 〔天神〕

備後三次は学問を愛する気風が強く、特に菅原道真をあげ、人形として大切にしてきました。梅鉢紋を散らした気品のある容姿で、座像・立像・牛乗り・松負・梅持の形体があります。

#### 〔武者物〕

男児の雄々しい成長を願って、武者物が作られています。歴史上の英雄と讃えられていた加藤清正や源義経、中国の三国志に登場する関羽などがあります。

#### 〔女物〕

菊・牡丹・桜・扇・羽子板・三味線・瓢箪(ひょうたん)など、日本を象徴するものを抱えており、誕生した女兒が美しく優しく成長することを願う気持ちが込められているものです。

※これ以外にも、家業繁栄を願った縁起物や十二支の動物なども作られています。

### ●11~4月/色づけ作業



#### 素焼き

800度~1000度の窯で約10時間焼き上げる。この窯焼きは現在、1年間に12~13回行い、年間に千数百体つくられている。



#### 下塗り

素焼きされた人形に牡蠣の粉末(胡粉)で全体を白く塗る。その後、肌の部分(顔、手、足)に再び胡粉を、濃度を変えながら10数回塗る。乾いたら布で磨く。



#### 着色

最初に、顔を描き、その後、胴体の色付けに入る。色付けは色の薄い部分から濃い部分へ、順に色を重ねていく。



#### にかわ塗り(仕上げ)

光沢のある部分に生にかわを塗り、色を発色させると同時に光沢も出す。人形によっては「つや消し」部分を残し、人形的美しさを一段と強調させる人形もある。



#### ニス塗り

人形の色を保護するためにニス塗る。以前はニスは塗っていませんでしたが、現在は塗る場合もある。「いつまでも美しい光沢を保ってほしい」という五代目丸本氏の願いが込められている。